

〔資料紹介〕

阪 正 臣 研 究 ― 資 料 留 ―

八 木 意 知 男

要 旨

御歌所寄人、昭和度大嘗祭主基方歌作者として知られる阪（坂）正臣は神道人・歌人・書家という三つの顔をもっている。この正臣には家集『樞屋全集』（全五巻、以下本稿では『全集』と称す）があり、また『三拙集』（昭和二年、古稀を記念して自筆を木版としたもの。後に石版及び活版のものもつくられた）が存し、彼の歌は全て把握可能と思われるがちである。ところが、『全集』は正臣の歌を網羅している訳ではなく、書家としての活動は『明治天皇御集』『昭憲皇太后御集』の版下浄書しか知るを得ない。つまり、彼の事跡の全貌は『全集』と『三拙集』のみでは知ることが出来ない。

そこで拾遺補正を為すべく架蔵資料に依って作業した三回目である。しかし、これでも全てを扱い得た訳では

ない。ここに紹介するのは17点であり、条幅・短冊の類は一部を除き含めない。それはそれで量り得ない点数が予想される故のことである。

『全集』・『三拙集』等に未入集の歌は、多くの本のかたち[・]のものに発表されてある。この点をよく理解する必要がある。そして、明治から戦前の間の資料はめつきり目にする機会も少くなっている。彼此を考え資料の表紙も掲げ、留とした。

キーワード

阪正臣 歌の拾遺 書道本 資料紹介

はじめに

昭和度大嘗祭主基万歌作者として知られ、明治・大正・昭和初期の歌の世界に名を残す阪正臣には『樅屋全集』（全五巻）があり、一万首を越える数の歌が収録されてある。そして、これを見ると正臣が歌を通して交わりの輪を広げた様子が覗われる。

例えば、正臣は西本願寺大谷光尊（二十一世、法名は明如、明治三十六年没）と深く交わり、三夜荘での歌宴や家集『六華集』の浄書もあった（『立命館文学』第六三〇号所載拙稿）。さらに『全集』では次の如きを拾うことが出来る。

大谷光尊君の一周忌に雪といふことを、簀子、文子の二君よませられしかば、

はかなくてかへりし年のはつ雪は 君をおもひのつもるなりけり

同じをり、なむあみたふの六字をかしらにおきて、六首をたむけまゐらす、

なむとよびみだとなふる声の中に うかびきにけり君が面かげ

むつの花いけの枯葉にさくみても はちすのうへの君ぞこひしき

あふぐかな目にはみえねど心には 獅子のうてなの君がおもかげ

みるまゝにいましゝ其世偲ばれて なみだもそはる君がみづくき

たきゞつきし去年のこの頃思ひ出 つるの林にねをのみぞなく

ふねあれど車はあれど君がすむ たのしきくにはゆきてとはれず

大谷光尊上人十三回忌に、春雨

はるさめのそらあふぐにも法の水 よをうるほしゝむかし思ほゆ

九条武子刀自追悼、藤花

うへもなき色を四方よりあふがれて うらみのこらず藤はちる覧

ここには単に見知つていると言うだけに止まらない深さがある。『(京都) 邦光社歌会 第二集』(明治二十二年九月

刊)に光尊は

兼題春曙

花をめで鳥をうらやむ世の人の こゝろにかなふ春の明ぼの

と出詠し、妻大谷枝子も

『全集』二、六二七～六二八頁

『全集』二、九八七頁

『全集』四、一六二頁

月雪のいづれはあれど山ざくら ほのくゝにほふ春のあけぼの

と出詠。阪正臣は

うちひさす都の空のいつはあれど 山のはかすむ春の曙

である。つまり、大谷光尊夫妻と阪正臣は同じ場で歌を詠んでもいるが、上に掲げた追悼歌は単なる知己を越えて心を通わしたことを示している。正臣にとって、歌は人と交わる原点ともなっていたのである。

そして、彼には自撰の『三拙集』（昭和二年刊。歌と書と画を融合させたもの）なるものが存在することも知られている。実際には『樅屋全集』も正臣自身の手になるものを基本としており、自撰の風が強いものである。

正臣が草稿『耕餘漫筆』（一～四）、『井蛙漫吟』（一～五）、『茅田の莠』、『手習いの種』（一～三）、『時時集』（上・下）、『樅園詠草』、『蛙侶吟稿』、『正臣歌集』、『樅屋詠艸』、『ちたのはぐさ』（一～二）、『正臣歌集』（一～三）、『樅の小枝』（一～二）と整理自撰した時、既に捨てられた歌が沢山存し、この草稿に依って『全集』は成立しているのである。捨てられた歌は個人家集をはじめとする既出版物に多く認められ、これを拾わない限り阪正臣歌の全体は把握できない。

また、阪正臣は書家としての顔を持っていた。その面目を発揮したのが『明治天皇御集』（全三巻、大正十一年刊）の版下浄書である。その筆跡は「女学校流」と称され、特に仮名文や歌の世界で高く評価された。為に、彼が歌を書いた条幅や短尺は人々に需められたのである。久邇宮良子女王殿下（後の昭和天皇后）の書を拝見していたのは小野鷺堂であったが、大正十年（一九二一）からは正臣である。加えて大正十四年（一九二五）からは皇太子妃良子殿下の御歌拝見の命もあった。

更に、彼は佐野晋遂・平田鐵胤・権田直助門の国学を修め、神道人であった。故に『祝詞宇比麻那毘』（『祝詞うひまなび』）（明治十六年刊）が処女出版物となるし、当初神社界へ身を置いたことである。

かくの如き巨大な存在である阪正臣に迫る為に、今為すべきことは彼の作品を一つでも多く知ることである。そこでこれまでに作業として存在確認をした偶会の資料を紹介した『立命館文学』六三〇号、『皇學館大学佐川記念神道博物館報』二四号)。本稿はこの前二稿の続きである。

資料紹介

本稿で扱う資料については、概ね次の要領により紹介する。

- (ア) 紹介資料の書名は、格別な事情が無い限り表題に依った。
- (イ) 各歌の引用は、本のマ、であるが、上句と下句の間を一字アキとした。これは読み易さの為であり他意は無い。
- (ウ) 資料の書誌は私が必要と考える最少限に止めた。
- (エ) 念の為に書影を掲げるが、これは「見ていないのではないか」等の嫌疑を避ける為であり、敢えて縮小コピー版を用いている。
- (オ) 整理の都合上、資料には通し番号を付した。

(1)『子日のかすみ』(一冊)

尾州知多郡小鈴谷村^{コスガヤ}(現、愛知県常滑市小鈴谷)の醸造家盛田久左衛門命昭が、明治三十三年(一九〇〇)が庚子に当り自家酒銘「子の日松」と重なる故を以って、「子の日松」の宣伝の為に著名歌人に乞い亦広く懸賞募集した歌を一冊とした歌集。

兼題「子の日松」。伏見宮文秀女王・近衛篤磨・松浦詮・高崎正風・津守国美等の歌と共に懸賞撰歌を備う。

縦217耗×横149耗、墨付総頁268。活版洋装、袋付。発行者盛田久左衛門、編輯者長谷川百太郎、印刷所扶桑新聞社、発行所盛田本店（知多郡小鈴谷村）、発行日明治三十三年十二月廿二日、非売品。
 阪正臣の歌は、「撰外」部に他の御歌所関係者の歌と共に次がある。

御歌所寄人正七位 坂正臣

はるの野のかすみにゑひてひきためし まつをまくらにねの日をそする

（コノ歌『全集』ニナシ）

懸賞撰歌の部にあるのは八木捨七郎（多屋）をはじめとする地元有力者と伊勢国白子等の取引き先が多い。



〈図版A〉
 歌集『子日のかすみ』
 表表紙

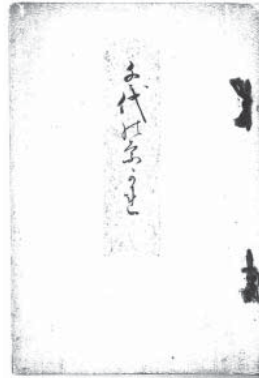


〈図版B〉
 歌集末に載る「子の日松」
 の広告

(2)『千代のなかれ』（一冊）

明治三十七年（一九〇四）、清水治兵衛直興が六十一歳となり還暦の賀筵をひらくかわりに、四十歳となった息男清水市太郎重国が全国から寄せられた絵画・歌・詩・俳句等の賀詞を一冊に綴めたもの。

編輯兼発行者清水市太郎、印刷所玉花堂（名古屋市南区熱田市場町）、発行明治四十五年（一九二二）三月、非売品。
 縦224耗×横154耗、総頁52、活版和装。



〈図版C〉
『千代のながれ』表紙

兼題「河水久流」にて鍋島直大・松平乗承・植松有経・小杉楡邨等と共に阪正臣の歌がある。

(河水久流)

從五位 坂正臣

松のかけうつる小川の水の色も 幾代の春にわかゝへるらむ

同

君が代にあふみの海し深ければ やそうち河の末もほそらす

(3)『常磐能佳氣(常磐のかげ)』(一冊)



〈図版D〉
『常磐のかげ』表紙

明治四十五年(一九一二)古稀の祝寿を迎えた毛利安子(公爵毛利元昭母堂)を祝う歌集。

縦257耗×横183耗、全墨付丁数164。版心無。活版和装。非売品。松の空押

文様の表紙中央に題箋を貼。編輯者は井関美清(近藤芳樹門、毛利家々令)、

発行者は塙忠雄(忠韶男、温故学会創設者)。発行は大正三年(一九一二)

十一月二十五日。

口絵写真に閑院宮妃智恵子殿下、東伏見宮妃周子殿下、伏見若宮妃絳子

殿下、梨本宮妃伊都子殿下、朝香宮妃允子親王殿下、北白川宮妃房子内親王殿下、竹田宮妃晶子内親王殿下、伏見宮

文秀女王殿下の詠歌そして安子の歌と肖像を掲ぐ。

兼題「松年久」のもと阪正臣の

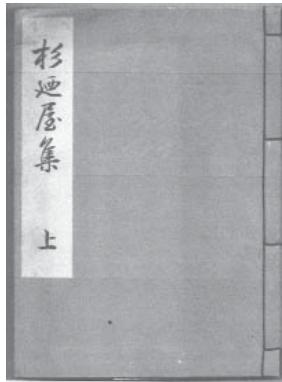
從五位 阪正臣

ちよまでも君かよるへきかけにとて
松は野山に生ひ栄ゆらむ
が存す。この歌は『全集』未収。なお、

男爵夫人 九條武子

としく〜に若かへりつゝ栄え行
そのふの松やよろつ代の友
が入集することもふれておく。

(4)『杉廼屋集』(上・下)



〈図版E〉
『杉廼屋集 (上)』表紙

昭和五年(一九三〇)、八十歳にして歿した三輪直樹十三回忌に合わせ
て出版された私家集。杉の舎三輪直樹は名古屋の人。歌は石山豊岡・植松
茂岳・植松有園(茂岳二男)の門人にて、明治四十五年の歌御会始の撰に
預る。

縦260耗×横188耗、石版和装。編集兼発行者三輪権蔵、印刷者佐橋繁造(名
古屋市南区)。入江為守の題字有り。

阪正臣は撰歌を為し(編集者跋文に依る)、自筆の「杉廼舎集はしがき」
を添う。

(5)『鳩のうみ』

滋賀県栗太郡常盤村（現、草津市）の克継吉田虎之助が還暦を迎えた記念として、私蔵の近江国人が近江国を詠んだ歌の短尺を、一人一首と限定して翻刻し、詠者略伝を記した資料集。

縦233耗×横161耗、活版和装本。昭和三年（一九二八）十二月発行。編輯兼発行者吉田虎之助、印刷所太陽印刷合名社（在大垣市）、全九十四丁。入江為守題字・川合玉堂題画・山元春挙賀画・岡部譲（元多賀神社宮司）序文、等を備う。阪正臣は本書に

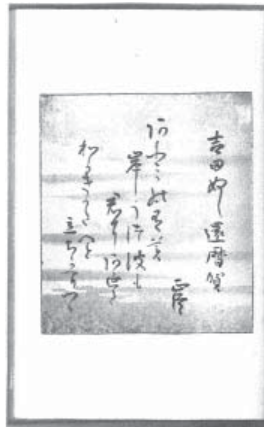
吉田ぬし還暦賀

正臣

あふみのうみ岸うつ波も君にあえて わかきかたへと立ちかへりつゝ
なる色紙を寄す。



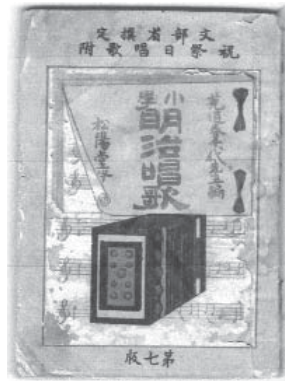
〈図版 F-1〉
『鳩のうみ』表紙



〈図版 F-2〉
口絵

(6)『小学明治唱歌』（一冊）

縦149耗×横106耗、総一三四頁の小冊である本書は、明治二十六年（一八九三）十二月に初版、明治二十九年（一八九六）



〈図版G〉
『小学明治唱歌』表紙

五月に三版が出された。明治二十六年八月、文部省が祝日・大祭日儀式の折に用うる歌詞と楽譜を定めたのに対応する。

菟道春千代編、今古堂活版所印刷。

この本には「阪正臣作歌」と明記されたものが二編存する。両歌共に『全集(五)』に見えるが異同がある。傍線を引き『全集』の本文を示しておく。

(ア) 国旗 阪正臣作歌

(一) 天津日影のくれなゐを、そめいだしたる此旗ハ、
吾大君のくもりなき、御代の光をうつすなり。

(二) よその国までかゞやける、此日の丸の旗見ても、
吾日の本の国民ハ、大和魂みがくべし

(三) 旗のひかりはくに人の、心の色のかけなれば、
ひかりをますも失ふも、人の心によりぬべし
(第三連は『明治唱歌』にはナシ)

(イ) 教育勅語拝読の歌 阪正臣作歌

(一) 千代田の宮に千代かけて、世をしろしめす大君の、
くだしたまへる御言葉に、よろづの民の万世も、
よるべき道

ハそなはれり、行くべき道ハそなはれり

(二) ひとりの君をいたゞきて、二人の親をかしづきて、
妹背同胞友垣も、むつみあひつゝ御をしへに、
そむかぬまことあらはさん、
違はぬまことあらはさん

(三) 瑞穂の国に生れきて、大御宝の名を得つつ、
御代を守らん吾ともの、道のしるべのみことのり、
仰ぎてよまん
春の日も、俯しておもはん秋の夜も

(7)『歌』誌第六卷第十一号(一冊)



〈図版H〉
『歌』誌 表紙

縦220糎×横148糎、全140頁。活版洋装。明治四十一年(一九〇八)十一月に「大日本歌道奨励会」より出版された月刊機関誌の一冊。この折の同会総裁は有栖川宮威仁親王殿下。

当号には、

明治四十一年十一月五日宮中月次御歌会の詠進歌〈兼題〉

たにの菊

坂(マ) 正臣

たきちゆく瀬のともかをる心地して きく盛なりたにそひのみち

明治四十一年十一月三日天長節詠進

初紅葉

坂(マ) 正臣

君かよをうたふこゑして初紅葉 のきはおほへりさとのまなひや

明治四十一年十一月八日有栖川姫宮(実枝子女王) 御慶事奉祝歌

寄川祝

坂 正臣

すゑひきて国のとみ草おほすへき 川瀬のおとはよろつよのこゑ

(明治四十二年) 十一月五日宮中月次御歌会詠進歌〈御通題〉

田家晩秋

坂^(マ) 正臣

秋深み時雨ぬまとややほしねを かりいそく覧小山田の里

寛 坂^(マ) 正臣

うつはよふわつらひもなし山里は 覧なからに顔も洗ひて

がある。

また、宮内省御歌所御校正の『日月帖』の広告が載る。『日月帖』は明治兩陛下の御製集であり、御歌所寄人阪正臣が版下浄書をなし、金属版としたもの。後に兩陛下御集の元となる。

右五首中三首は、

「瀧路ゆく」歌 — 『全集 二』七七五頁。

「秋深み」歌 — 『全集 二』七七四頁。

「器^{うつは}よぶ」歌 — 『全集 二』七七五頁。

ただし第四句を『全集』では「覧の水に」に作る。

と異同あり。また「君がよを」歌と「未^{すゑ}ひきて」歌は『全集』になし。五首共に『三拙』になし。

(8)『清交歌集』(一冊)

清閑寺経房が会長の「歌壇清交会」が、会の創立五周年記念として刊行したもの。昭和八年(一九三三)一月迄に集められた歌五百余首を備う。

編輯兼発行者は山口喜六、発行所は歌壇清交会、印刷所は永田享壽堂印刷所。活版和装、147頁、帙入。定価壹円式

〔資料紹介〕阪正臣研究



〈図版1〉
『清交歌集』表表紙

拾銭。昭和九年（一九三四）年九月発行。縦233耗×横160耗。一面五首。

内容は新年・春・夏・秋・冬・雑の六つの部立。巻首に皇太后大夫兼御歌所々長入江為守の題字を置き、清閑寺経房の「はしがき」。巻尾に栗山直扶の識語。撰に当たったのは会員の中島清作と栗山直扶であるが、最終的には栗山の手になるか。

当該歌集には次の如き二十二首の阪正臣詠歌が認められる。阪は昭和六年（一九三一）八月二十六日に歿しており、「御遺族よりも金玉の御遺詠

をおくりたまはり」（清閑寺経房「はしがき」）たるものである。

新年部

若水

阪 正臣

アいつる口ねちてをかめにうくるかな たよりよき世のとしの若水

山家新年

阪 正臣

イおのつから松竹生ふるいほのかと 梅さへ咲きてとしたちにけり

（右一首『三拙』第二丁に有）

春部

行路春草

阪 正臣

ウなつかしと思ふあまりに踏みてゆく われなうらみそ野路の春草

春人事

阪 正臣

エ春ふかき花のみやこはうたひめも　をとり子も皆いそかしけなる

（右一首『全集』四、一五五三頁、昭和二年三月に有）

雛
阪　正臣

オをさな子もとのつくりして君をいつく　手ふりめてたき雛遊かな

（右一首『三拙』第十七丁に有）

夏部

夏日
阪　正臣

カ呉竹の葉こしの月のかけ見れは　夏はひるまのものにそありける

（右一首『三拙』第二十六丁に有）

夏草
阪　正臣

キ風のゆくみちのみ見えて夏草の　わけ入かたくなれる野辺かな

（右一首『三拙』第二十七丁に有）

暁蓮
阪　正臣

ク咲く時におとたつときく蓮の花　このあかつきにいさこゝろみむ

水声涼
阪　正臣

ケそのひゝきすゝしすゝしと聞ゆなり　岩よりおちて岩をうつみつ

秋部

虫
阪　正臣

コ鳴きかはす虫の音すゝしあきの風　わたる野川のみつをへたてゝ

(右一首『三拙』第三十四丁に有)

菊帶露

阪　正臣

サさしのほるあさひのかけに霜とけて　露けくにほふ庭のしらきく

(右一首『全集』四、一五三二頁、大正十五年十一月に有)

秋興

阪　正臣

シもみちかりひさこの酒をあましきて　野守かいほの月にゑふかな

(右一首『三拙』第三十四丁に有)

冬部

時雨

阪　正臣

スみつゝゆく月にさはらぬひとむらの　雲よりそゝくさよ時雨かな

(右一首『三拙』第四十一丁に有)

雪

阪　正臣

セ雪やみておほそらはれて世の中は　たゝふた色となれるけさかな

(右一首『三拙』第四十五丁に有)

社頭雪

阪　正臣

ソふもとなる浅間の宮も富士のねと　おなしさまなり雪のつもりて

(右一首『全集』四、一七三〇頁、昭和五年十二月に有)

寒夜月

阪 正臣

タかれはらす池をおほへは月のかけ うつりかねてそ空にこほれる
雑部

富士山

阪 正臣

チ宮まうてはてゝ代々木の広野より またさしあふく富士の神やま

(右一首『全集』四、一七二六頁、昭和五年十月に有)

軍馬

阪 正臣

ツ老馬のいなゝきたかしみいくさに つかへしときや思ひいつらむ

(右一首『全集』四、一七二九頁、昭和五年十一月に有)

水雷艇

阪 正臣

テくもゝなき海原にしてたちまちに 船うちくたくいかつちやこれ

(右一首『三拙』第六十四丁に有。ただし「水雷」題)

明治天皇

阪 正臣

トたゝへむにことはのはなそなき明けく 治めましつるきみのみいつは

(右一首『全集』四、一六四八頁、昭和三年十月に有)

北畠親房

阪 正臣

ナ弓矢もて筆もて君そはらひける あまつひつきにかゝるむらくも

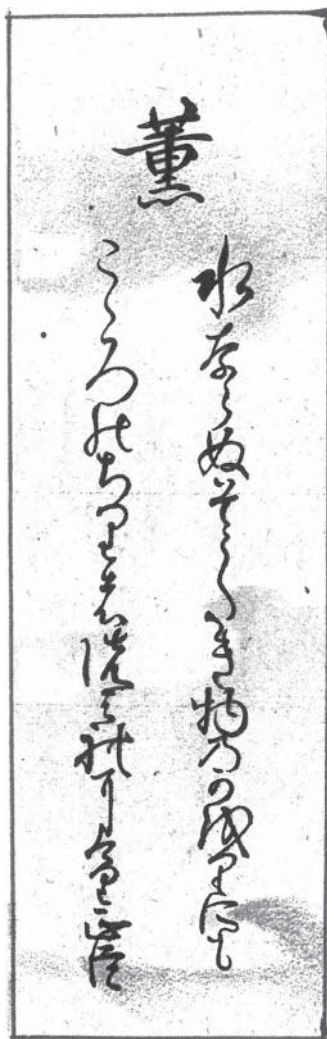
(右一首『全集』二、七八七頁及び『三拙』第六十丁に有)

思想善導

阪 正臣

ニよきことゝ共に入りくる外国の あしきならはしいかにふせかむ
正臣の詠者名表記は、当該書では「阪・正臣」で統一されている点を特記しておく。

(9)線香添付チラシ（一葉）



〈図版J〉

愛知県在北勝堂の線香に添えられたるもの。

(原寸大)

右、

薫

水ならぬそらたき物のかをりにも こゝろのちりは洗はれにけり

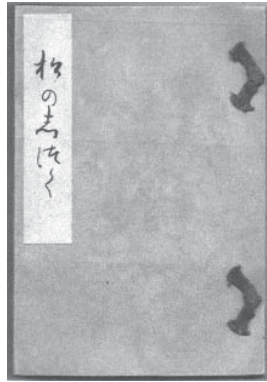
正臣

(右一首『全集』になし)

なる歌は、愛知県の香商北勝堂が線香に添付したチラシ。正臣染筆の短尺をそのまま縮刷印刷したもの。昭和二十一

年より以前のものなれど不明。

(10)『松のしづく』(一冊)



〈図版K〉
『松のしづく』表紙

「紀行と実詠和歌集」(内題)と銘打った本書は、公州西野亀太郎編著。

昭和十二年(一九三七)。京都市伏見区の武揚社発行、非売品。縦220耗×横150耗、活版和装、全147頁。

御歌所参候栗山直扶(西野公州の師)の序を備う。

本書「実詠和歌集」部に

夏の頃那須にて

東京 阪 正臣

家のかすいくはくも無き那須岳の ふもとのさとに燕むれとふ

を採る。この歌、『全集』『三拙』にはない。

(11)『女鑑』誌第二〇五号(明治三十三年五月二十日発行)

本誌は東京国光社から、川崎直樹を編輯兼発行人として出された雑誌。明治二十五年(一八九二)初号発刊。本冊は明治三十三年(一九〇〇)五月十日に皇太子嘉仁親王殿下と九条道孝娘節子姫(後の貞明皇后)との御婚儀大典を特集する。縦220耗×横148耗、一〇〇頁仕立。ここに次が載る(七十八頁)。

奉祝の唱歌

華族女学校教授 阪 正臣 作歌



〈図版M〉
『祝詞宇比麻那毘』表紙

(12)『祝詞宇比麻那毘(上)』

明治十七年(二八八四)七月、著述人を坂正臣、出版人を平田胤雄(平田篤胤曾孫)として『祝詞宇比麻那毘(祝

詞初学)』の上巻が出版された。この本については『国学者伝記集成』は記録せず。架蔵は上巻のみである。

縦225糎×横151糎、青色表紙。活版楮紙袋綴。墨付全73葉。版心は「祝詞初学」。奥付では「坂正臣」名。巻首に木頼嘉平刻の「権大教正権田直助」の「はしがき」(二葉)、活版による「凡例」(五葉)を備う。

- 歳旦
- 元始祭
- 紀元節付神武天皇祭遥拝
- 祈念祭付御年神祭
- 風神祭
- 除蝗祭
- 道饗祭
- 鎮火祭



〈図版L〉
『女鑑』表紙

この唱歌、『全集』に未載。

朝日影
あさひかげ

学習院助教 納所弁次郎 作曲
学習院華族女学院 学生生徒 唱歌

待ちにまたれし、みいはひの、よき日と今日はなりにけり、臣民われ
らがうれしさは、みちあふれたり、あめつちに。
はるのみやまの、あさ日かげ、ふちのうらばに、さしそひぬ、園にし
げらむ、わかたけの、千代のさかえも、今ぞ見む。

○神嘗祭遙拝 ○新嘗祭 ○大祓

上巻では以上に就いて、まず祝詞作文に使用可能な語の簡単な説明を為し、次いで例文を掲げる。

(13)『^{訂増}女子手紙文』(一冊)

本書は、明治三十六年(一九〇三)十二月に第十五版として大倉書店(東京日本橋区)より発行された(初版は明治三十二年)小野鷲堂の女子手紙文例集である。

縦227耗×横154耗、総頁142。和装本。内題は『^{訂増}女子手紙文』であるが、表紙題箋には『^{訂増}女子手紙の文 完』とする。この巻首に配された「皇后陛下御製金剛石歌」の染筆者は

臣大江正臣謹書

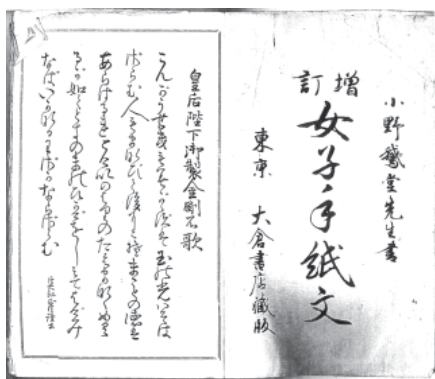
とある。「大江正臣」は阪正臣がこと。この大倉書店からは正臣は関根正直編輯・阪正臣書なるかたちで、数種の文例集を出している。

因みに、小野鷲堂(文久二年〜大正十一年)は華族女学校教授として教



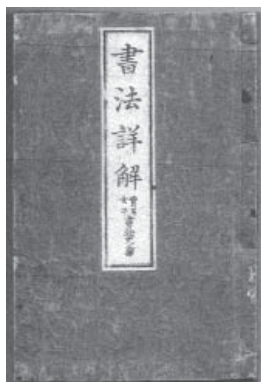
〈図版N-1〉
表表紙

壇に立ち阪正臣と十年間程机を並べた。やがて和様書道研究を目的に「難波津会」を創設。ここに集っていたのは大口鯛二・尾上柴舟・田中親美・多田親愛・阪正臣等であった。



〈図版N-2〉
見開き部分

(14)『書法
詳解 実用女子書翰文』(一冊)



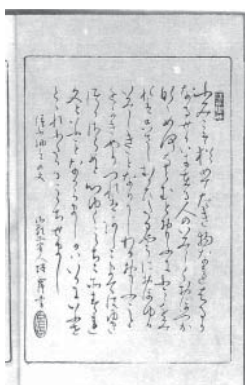
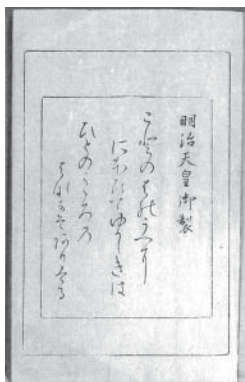
〈図版0-1〉

『書法詳解実用女子書翰文
之部』表紙

大正三年(一九一四)に帝国講学会から発行された本書は、武島羽衣(又次郎)著、中村春堂(梅太郎)書、全161頁。縦230耗×横154耗、石版和装。紺色表紙中央に題箋貼。「書法詳解シリーズ」中の一冊。

巻首に明治天皇御製(色紙型)

ことのはのうへにほひてゆかしきは ひとのこころのはなにそ
ありける



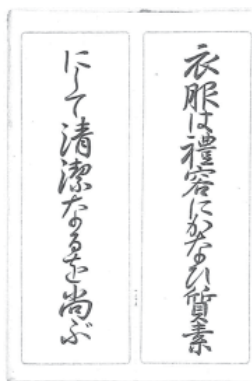
〈図版0-2・3〉

正臣筆御製と清女の文

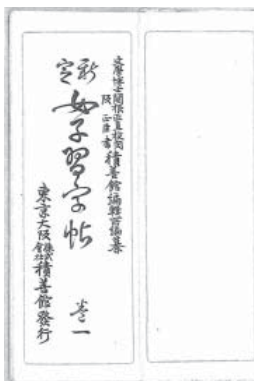
と、さらに「清少納言の文」なる一文
を「御歌所寄人 坂正臣書」と記して
載す。

(15)『新
定 女子習字帖(巻一)』(全五冊)

大正十四年(一九二五)九月、関根正直校閲・阪正臣書のかたちにて積善館編輯所編纂で大阪・東京株式会社積善館から発行された。印刷は大阪市西区の北村一郎。縦218耗×横74耗、施風葉。表紙中央に貼題箋。



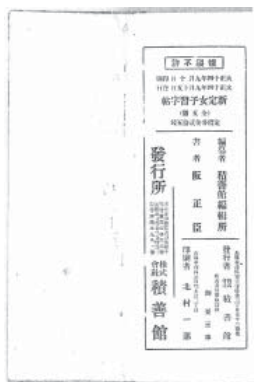
〈図版O-3〉
阪正臣筆内容部分



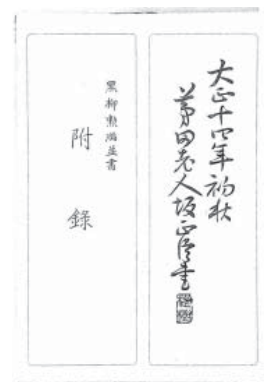
〈図版O-2〉
内表紙



〈図版O-1〉
表紙



〈図版O-5〉
刊記



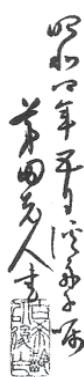
〈図版O-4〉
落款

前に資料として紹介した『立命館文学』同名のもの（富山房版）は『新定女子習字帖』（全四巻）でこの度紹介は「新定」語が角書となっている。また、当該積善館版は後年に付録として黒柳熟のペン字手本を備う。すなわち、阪正臣の『女子習字帖』には富山房版と積善館版の二種が存し、ここに紹介は積善館版である。

(16)『阪正臣四季歌帖』(一冊)



〈図版P-1〉
『阪正臣四季歌帖』表紙



〈図版P-2〉
落款部分

縦260糎×横186糎、全10丁のコロタイプ版和装本。編輯兼発行者は下中弥三郎、発行所は平凡社。昭和十五年(一九三五)五月に発行された本書は、平凡社の『和様手本大成』第十六巻である。

昭和四年(一九二九)五月に「茅田老人」号にて

夏の夜は(古今一六六) わかせこの(古今一七一)

契りけむ(古今一七八) 木の間より(古今一七八)

さよ中を(古今一九二) 萩か花(古今二三四)

みやまより(古今三一〇) ゆふされは(古今三一七)

梅の花(古今三三四) あらたまの(古今三三九)

昨日といひ(古今三四一)

と『古今集』集歌十一首を染筆した阪正臣であるが、晩年の多忙さの故か病を得、為に出版は延引、さらに昭和六年八月に黄泉国へと旅発った。本書は没後の出版となった。

(17)『臨野蹟』(一帖)

縦277糎×横90糎の法帖仕立、二十九折。栗表紙に書題箋。書名に知られる如く、小野道風を伝称筆者とする『秋萩帖』の歌(二番×十番)九首を、阪正臣が臨摸した手沢本。ただし、本品が何時如何なる事情に依り書写されたるものかは不明。無落款なる故確定は出来ないが、正臣の筆と考えられる故ここに紹介するものである。

恐らくは石版摺の版下と考えられるが、印刷方法の変化の中で取り残されたものであろう。

(18)『明治大帝画譜 付御逸事集』(一冊)

明治四十五年(一九一二)七月三十日、明治大帝は崩御なされ、即日嘉仁親王が踐祚、「大正」と改元された。そして大正元年八月十一日に本書は発行、同年八月十七日は第四版の発行となった。編輯人兼発行者は杉謙二、発行所は至誠社出版部。

縦224粒×横150粒、総頁数177、活版洋装、二段組。61点の画譜と140名を越す人々が語る明治大帝の御逸事とからなる。洋布金文字入表紙、定価80銭。

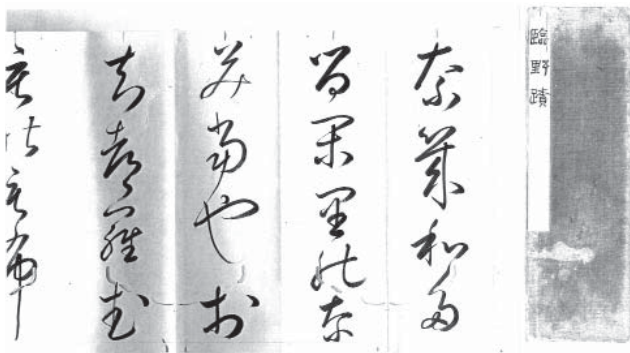
「御歌所主事 坂正臣氏談」(6)として「御歌道の御嗜みは先々帝御遺訓」なる一文

が載る(143頁下段、144頁下段)。

歌聖と仰がれる明治大帝の御歌の道が、孝明天王の御導きに依るものとするものである。この文、『全集』には未載。



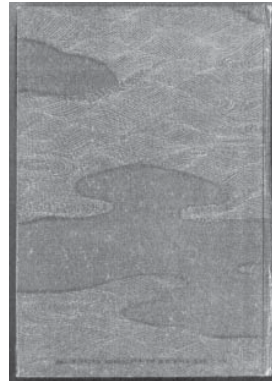
〈図版R〉
『明治大帝画譜』表紙



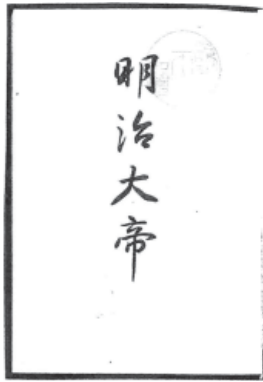
〈図版Q〉
『臨野蹟』表紙と巻首歌(部分)

(19)『明治大帝』(『キング』誌十二月号、第三卷第十一号附録)

昭和二年(一九二七)



〈図版S-1〉
『明治大帝』表表紙



〈図版S-2〉
『明治大帝』扉部分
阪正臣筆

十一月一日付にて編輯
兼発行人を長谷川卓郎
とする明治大帝を偲ぶ
一冊(八二八頁)が野
間清治の大本雄弁会
講談社から出版され
た。

多田北鳥装幀の本書
は、縦191耗×横132耗の
四六判、活版洋装本、
函入。

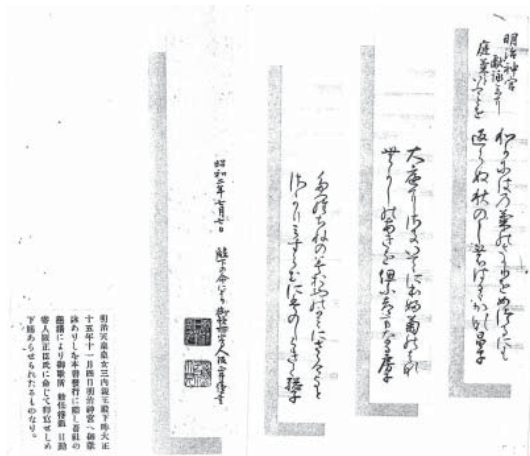
御歌所寄人阪正臣
は、本書に扉文字「明

治大帝」を書し、明治大帝皇女昌子・房子・聰子三内親王の御歌拝写、
「君臣水魚」題の偲ふ文、を寄せている。

「君臣水魚」文には、大帝と歌と臣下の結び付きが述べられている。



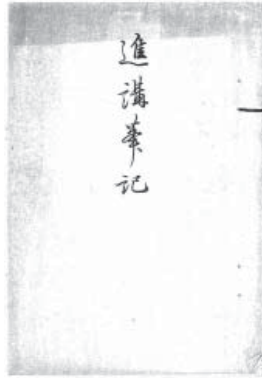
〈図版S-4〉
『明治大帝』所載の
阪正臣顔写真



〈図版S-3〉
『明治大帝』口絵 3内親王の短尺、正臣筆

御所における堂上流の御歌が景樹風へ転じたこと、京都における歌会向陽会への大帝の御期待、御歌所では聖上のを「金鳥」皇后のを「玉兔」と申し上げること、教育勅語中の語句を唱歌として学習院で歌わせたこと、等が述べられる。ただし、正臣作詞の当該歌は『全集』にはない。

(20) 参考資料『進講筆記』（一冊）



〈図版T〉
参考資料『進講筆記』表紙

縦196糎×横136糎、活版和装、総七葉。明治二十六年（一八九三）四月発行、編輯者大口鯛二、発行兼印刷者吉川半七。

本小冊は明治十六年（一八八三）一月六日に高崎正風（当時四十八歳）が御講書始に『古今集』の仮名序の精神的意義を御進講したが、その内容の再講を纏めたもの。

巻尾に正風門の香川景敏（香川景樹の孫、明治二十年歿）が、こは吾師

明治十六年一月六日御講書始に進講したまひけるを

両陛下ふかく歡感まし／＼けるよしを御かたはらに侍らひて陪聴せしおもと人たちより伝へうけたまはりかゝる金玉の説を世に残しおかぬもくちをしきわざなれば師にこひて再講を煩はし筆記しおくものならし

（・漢字を現在通行字体に改めた。
・闕字部分はマゝである。）

と記している。御歌所を確立し、阪正臣を強く導いた高崎正風の歌に対する考え方を示すものとして、参考資料とす。

ただし、ここでは一冊本として印行されたものを掲げたが、当該『進講筆記』の内容は、佐々木信綱編『明治名家家集（下）』（『続日本歌学全書』第十二編、明治三十三年、博文館）に収められてある。

おわりに

與謝野鉄幹の第一歌集『東西南北』（明治二十九年明治書院）に、落合直文や森鷗外等と共に阪正臣も序文を寄せている。しかし、この序文は正臣の『樅屋全集』には見当たらない。つまり、『全集』は彼の作品の全てを収録している訳ではなく、阪正臣の全貌を『全集』あるいは『三拙集』から得ることは出来ないのである。ここに阪正臣を考えようとする時には作品の拾遺作業が必要となる。

かくして始めた八木偶会の資料に限定しての紹介も三度となった。

○拙稿「阪正臣研究（承前）——『樅屋全集』拾遺補正——」（『立命館文学』誌第六三〇号、二〇一三年二月）

○拙稿「阪正臣作品の研究——資料整理札——」（『平成二十四年度皇學館大学佐川記念神道博物館館報』誌第二十四号、

平成二十六年三月）

と、本稿、合わせて計五十九点である。勿論これで阪正臣関係の資料の全てが整った訳ではない。この点に関して言えば、小泉芝三氏の大著『明治大正短歌資料大成』（Ⅰ——明治歌論資料大成・Ⅱ——明治大正歌書綜覧・Ⅲ——明治大正短歌大年表。昭和五十年七月、鳳出版）を見れば明白なことである。一連の本稿で採り上げていない集は幾つも存在する。しかし、この小泉著でも網羅されているとは言い難く、やはり更なる積み重ねが求められる。就中、習字手本等はリストも定かにないのである。

（本学名誉教授）